月刊

こころのとも

第九巻
七月号

校長の訓辞

いのちの大切さを
知ってほしい

人と人との
関わりを大切に
してほしい

そんなことを
言うくらいで
ほんとうに
子どもの教育が
できると
思っているの？

子育てと他己

子育ては
他己を育てる
根っこなり
自分と子どもの
両方にとり

人生を考え直して みたい人は（五四）

―『聖書』解説（三一）―

マタイ福音書第七章を続けます。

二四　だから、わたしのこれらのことばを聞いてそを行う者はみな、岩の上に自分の家を建てた賢い人に比べることができます。
二五　雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてそのに打ちつけたが、それでも倒れませんでした。岩の上に建てられていたからです。
二六　また、わたしのこれらのことばを聞いてそれ行わない者はみな、砂の上に自分の家を建てた愚かな人に比べることができます。
二七　雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてそのに打ちつけると、倒れてしまいました。しかもそれはひどい倒れ方でした。」

いよいよ山上の垂訓も、終わりに近づいてきました。これまで二年半にわたって取り上げてきました、さまざまなキリストの言葉も、ただ聞いて納得しただけで、行うことがなければ、ほとんど意味がないことを、ここで言っているのです。

そのことを、岩の上に建てた家と、砂の上の建てた家をたとえにして述べています。このたとえ話自体は、たいして難しいものではありませんが、ここで述べられていることは、とても大切なことです。

さまざまに言葉で述べることは、すべて、キリストの教えを実行するための動機づけに過ぎないとも言えるのです。もし、それを聞いただけで、実行しなければ、これほど虚しいことはないのです。釈尊も、悟りを開かれたとき、その悟りの内容を理解して、実行する人が出てくるかどうか、疑問を持たれました。それほど、悟りの真の意味を知り、それを実行することは難しいことなのです。そのことは、キリストの言われることがキリストの弟子たちによって、正しく理解されなかったことを、これまで何度も述べてきたことからも、お分かり頂けると思います。ですから、すこし余談ですが、たとえキリストの言われる通りにできなくても、常に反省し（悔い改め）ながら、キリストの言われることをひたすら信じ、実行しようと勤めることが大切になるのです。

私も、こうして、キリストの言葉や釈尊の言葉、老子

の言葉などを解説していますが、それは、「あたま」が発達した現代人にできるだけ理屈を言って「あたま」で理解して頂き、そうした人たちの教えを実行したいという動機を高め、現実に実行にうつして頂くためのものに過ぎません。もし、その効果がないとすれば、こうした試みも虚しいものと言えます。

釈尊も、既に取り上げました『釈尊のことば―法句経解説―』の（一九）と（二〇）で次のように述べておられます（第三巻八月号）。

（一九）たとえためになることを数多く語るにしても、それを実行しないならば、その人は怠っているのである。――牛飼いが他人の牛を数えているように。かれは修行者の部類に入らない。

（二〇）たとえためになることを少ししか語らないにしても、理法にしたがって実践し、情欲と怒りと迷妄とを棄てて、正しく気をつけていて、心が解脱して、執着することの無い人は、修行者の部類に入る。

学問（哲学）と違い、宗教にとって決定的に大切なことは、聖者の教えを実行・実践することです。ドイツの哲学者・カント（一七二四～一八〇四）は、根本的道徳法則として「すべての人が自分と同じように行為してほしいと望むことができるように振る舞え」と、内容としてキリストの黄金律と変わらぬことを、述べていますが、カントを始祖とするドイツ観念論の完成者・ヘーゲルに至っては、「戦争が文化を発展させる」、と全く道徳法則を無視したことを言い、ナチズムの基をつくりました。

できることと言える（思う）ことの間には大きなギャップがあります。卑近なことで言いますと、健康に悪いことをしないようにしたいと言うこと（思うこと）と、そうできることとの間には越えがたいギャップが存在しています。それは、さまざまな道徳的行為においても言えることなのです。

現代人は、できないことはできないと、始めから居直っています。できなくても、いつも反省して、しようと努力しなければなりません。それを可能にするものは、自分を超えた力によって自分が生かされて生きていると信じることができること、つまり「他己」にあります。いま、現代人がもっとも失った面です。

ところで本文に戻って、たとえにありました「岩の上に自分の家を建てた」とは、どういうことなのでしょうか。

それは、キリストと、その教えと、その布教者を信じ、実践して、自分のこころに不動の安心感をもたらすことを意味しています。

また、「雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけたが、それでも倒れませんでした」とは、どういうことなのでしょうか。

人生には、予測のつかない出来事が起こります。自分の力ではどうすることもできないようなことが、起こってきます。たとえば、室戸台風や伊勢湾台風のような大型台風であったり、関東大震災や阪神淡路大震災のような大地震であったり、もっと個人的には、自分の経営する、あるいは勤める会社の倒産であったり、交通事故であったり、連れ合いの突然死であったり、子どもの不治の病であったりするわけです。こうしたことが、ここでいう「雨が降って洪水が押し寄せ、風が吹いてその家に打ちつけ」るということに当たります。

そうしたことが起こりますと、多くの人は悲嘆に暮れ、生きる力さえ失ってしまいます。でも、キリストとその教えを信じ行うものは、それをとりわけ不幸なことと思わないで、へこたれず立ち直っていくことができるのです。それが、「それでも倒れない」ということなのです。

釈尊も、法句経（二五）で次のように述べておられます（第三巻十一月号をご参照下さい）。（二五）思慮ある人は、奮い立ち、努めはげみ、自制・克己によって、激流もおし流すことのできない島をつくれ。

自作詩短歌等選

大人と子ども

大人と子どもの
ボーダーレス化

それは
大人が
子ども化し
子どもが
大人化した結果

その原因は
人々の
他己萎縮と
自己中心化にある

居直って生きる

自分には
できないことと
居直って
生きる人生
哀れなりけり

理屈で分かっても

冷静に
理屈を言えば
分かるのに
己の欲に
執らわれりゃ
ついつい過ち
犯してしまう

父性は多様なもの

父性は
多様なものという

それなら
母性も多様なもの
人生そのものが
多様なもの

だから
価値も多様なもの

人はいま
何をしてもよい
そういう時代を
生きている

ただ
多数に支持されれば
の条件付きだが
（皆で渡れば怖くない）

日本人の無責任

日本人
みんなですれば
怖くない
誰も責任
とらずともよい

これもありがた
民主主義
あああありがたや
民主主義

不神・不信・不安

不神（不敬神）から
不信が起こり
不安に陥る

日本人はどぶネズミ

日本人
目つきの悪い
どぶネズミ
オドオド・キョロキョロ
ただ闇の中

（注）
人は
価値観を失って
オドオドし
得なものを求めて
キョロキョロする

天につばはけば

人の世を
お天とさまは
みてござる
天に向かって
つばはけば
かならず自分に
降りかかりくる

弱さを売り物にする

仏弟子という人の
弱さを売り物にする
書き物が
なぜかうける世の中
いったい
どうなっているの

依存症とは

依存症
他己を麻痺させ
代償に
自己の好みに
執らわれていく

依存症
自己と他己との
乖離から
自己へ執らわれ
依存強める

好むもの
全てのものが
依存する
対象となる
ひと・もの・行為

子供っぽくなった

いま
子どもたちが
幼児っぽくなった
という

そういう
大人も
子供っぽくなったのに
気付いているか

自作随筆選

神に選ばれた人

先月（六月）二十七日（土）の毎日新聞に、脚本家・内館牧子氏の書いた「神に選ばれた人」と題する記事が載りました。読んで、驚きました。

その記事の出だしは、次のようなものです。

世に名前の知られたスポーツ選手という人たちは、エリート中のエリートである。私はいつでも言っている。／「東大法学部から大蔵省に入るのなんか、スポーツでトップを究める人に比べれば、簡単なものだと思うわ」／アマであれ、プロであれ、スポーツで名を成す人たちは、神に選ばれた人たちである。神からの「天賦の才」がものを言う。努力だけではどうにもならない。

そして、こうした「神に選ばれた人」として、各界のスポーツ選手の名があげられています。また、記事の終わり当たりに、次のような文がありました。

昨今の風潮として、選手の家族が表に出過ぎるように思う。選手自身も「感謝」と称して家族を表に出

し過ぎるきらいはないだろうか。／家族は神からは選ばれた人ではなく、一般人である。神から選ばれた人が一般人に支えられていることに、ほほえましさを感じる場合ももちろんあるが、それも程度問題ではないだろうか。／私は家族への感謝は、基本的には家族内で伝えるべきものとだと思っている。家族が出てくると同時に、その選手から色香もオーラも消え、若くても好々爺（こうこうや）に見えてしまうのは残念でならない。

皆さんはこの文章を読んで、どんな印象や感想をもたれましたか。

これまで、内館牧子氏の脚本で放送された番組をＮＨＫでかいま見て、この人が社会的に受けることに、現代人の精神的な病理性を感じてきましたが、この文章を読んで、まさにそのことを確認する思いがしました。

その病理性の一つは、余りにもヒーローを求め過ぎていることです。それは、日本人がとても危うい精神性をもっていることを示しています。私の理論で言いますと、「他己」の萎縮を、ヒーローを求めることによって補おうとしているのです。かつて、世界を席巻したファッショを思い出させます。

また、そうしたヒーローを「神に選ばれた人」、つまり、神の座に高めることによって、このことは、いっそう強いものになっています。

私たち人間をはじめ、この世のあらゆる存在は、神から贈られたものなのです。それは、存在を神に許されたということです。なにも、特定な能力を有する者だけが、神から選ばれたわけではありません。あらゆる存在が神から選ばれているのです。内館牧子氏の理屈からすれば、何らかの能力障害をもち、努力にも限界をもつものは、「神に見捨てられた人」とでもなるのでしょうか。

人を差別する根源は、人が他己を萎縮させ、自己を肥大させて、他者との比較の中に安心を見いだそうとするところにあります。それは、相対な者が陥りやすい傾向なのですが、克服されるべき課題と言えるのです。

ヒーローを求め、それを神の座に奉（まつ）ることは、自らの他己萎縮・自己肥大を示す証拠以外の何ものでもありません。

私たちが神の座に奉るべき対象は、「解脱の境地に達した人」です。それを、私は、歴史的に古いという意味で、釈尊、老子、ソクラテス、キリストの四聖に求めています。そうした人の教えを信じ、それに則って生きるときだけ、人間は、相対比較をまぬがれ、差別を克服できるのです。

エゴに閉じた母

ある小児科医の話ですが、乳児に母乳を与えている母親で、喫煙している人に、喫煙すると母乳にニコチンが入って、子どもに害が及ぶ、と告げたところ、「やめます」と言ったので、当然、たばこをやめるものとその医師は、思ったそうです。

ところが、そのお母さんは、たばこではなくて、母乳をやめて人工乳にする、と言ったということなのです。

この話を聞いて、なるほどと思いました。私はいま、多くの母親が子どものために自分が我慢するということが、殆どなくなりつつある、と感じているからです。

昔なら、母なるものは、我が子のためには何を犠牲にしても、尽くしてやりたいと思ったものです。ですから、母の恩は海よりも深いと語られました。

でも、今は逆で、子どもを犠牲にしても自分の欲望を追求しようとしているように思われます。夫の給料だけでも生活して行けるのに、子どもを保育所に預け、欲望追求のために働きます。

でも、そんな母が育てた子に、人を思いやるこころが育つのでしょうか。

釈尊のことば（七〇）

―法句経解説―

（二四二）不品行は婦女の汚れである。もの惜しみは、恵みを与える人の汚れである。悪事は、この世においてもかの世においても（つねに）汚れである。

まず、出だしの「不品行は婦女の汚れである」という教えは、現在の日本人には、ほとんど受け入れられないものになってしまっているのではないでしょうか。たとえ、結婚している女性でも、機会があれば、誰かすてきな男性と恋愛したいと、秘かに願っているように、私には思えるのです。

こうして性が乱れますと、それは家庭が乱れるもとになります。家庭は、人間生活の基本です。人間生活の基本が乱れるということは、人間そのものが乱れるということです。いま子どもが乱れていますが、それは、こうした家庭における大人の乱れを反映したものに過ぎません。

しかし、すてきな男性も、単に相対な存在に過ぎません。相対なものは有限です。ですから、たとえ随筆で取

り上げました、筋骨隆々のスポーツ・ヒーローであっても、やがて年老いて行きますし、時々新聞ざたになりますように、ヒーローであった人が、道徳に反した行為をするだけではなく、犯罪を犯すことさえ起こるのです。

相対なものは、みんな業を背負っています。その業のあり方が「そりが合う」というだけに過ぎません。そんな「そり」は、すぐまた合わなくなってしまいます。真にこころが満たされることはないのです。それは、一杯のビールにたとえられるのです。条件が変わって、汗をかいて喉が乾けば、また、ビールが欲しくなります。真に満たされることはないのです。

「他己」を萎縮させ、信じるものを持たなくなった現代人は、自己の欲望の満足にだけ安心を見いだすのです。先日、講演で「して頂いて／ありがとう／／させて頂いて／ありがとう」という「二つの感謝」と題する自作の詩を紹介しましたら、「それはセックスのことですか」と質問した男性がいました。まさに他者への奉仕ではなく、互いに自己の満足にのみ安心を見いだす現代人の心的傾向の最たるものと、納得しました。

次の「もの惜しみは、恵みを与える人の汚れである」ですが、これも現代人にはほとんど訴える力のない教えになってしまっています。この「恵みを与える」と言いますのは、いわゆる「お布施」のこころですが、私の実生活でも、真にお布施のこころをもった人には滅多にめぐり合いません。経済的に豊かになればなるほど、こころは貧しくなり、お布施のこころも失われていくのではないかと思われます。

最後の「悪事は、この世においてもかの世においても（つねに）汚れである」ですが、この中の「悪事」とは何なのか、なかなか難しいと思います。私たち相対な存在は、相対な判断に陥ります。広島と長崎への原爆投下は、アメリカにとっては善いことであっても、日本にとっては悪いことだと言えます。こんな多数の人命に係わることが、善になったり悪になったりするわけですから、もっと小さいことは、言うに及ばずです。

では、悪と善を定義する道はないのでしょうか。私は、それを自分の理論で定義しています。つまり、悪とは、私の理論でいう「自己」に執らわれた行為であり、善とは自己を制して「他己」を働かせる行為であるというものです。

ですから、悪事といっても、世間の法律に違反する行為だけではありません。仏教でいう「法」や、一般にいう「人の道」といったものに反する行為も含まれます。「行住座臥が法にかなう」という言い方がありますが、

これこそが、悪事から完全に開放された状態だと言えるのです。

（二四三）この汚れよりもさらに甚（はなは）だしい汚れがある。無明こそ最大の汚れである。修行僧らよ。この汚れを捨てて、汚れ無き者となれ。

前偈で述べた汚れよりも、もっと大きな汚れは、無明である、というのですが、では、無明とは何なのでしょうか。「この汚れを捨てて、汚れ無き者となれ」と言われても、それが何であり、どうすればそうなれるのかが分からなければ、ほとんど意味がありません。

私の理論で言いますと、無明は意識の働きの中にあるのではありません。それは、無意識の働きの中にあるのです。無明は、明かりが無いと読めますが、それはしかも、無の（場所の）明かりの喪失でもあるのです。

私たち人間は、成長の過程でだんだん色々なことができるようになりますが、それは実は、自己への執着を強めていることでもあるのです。かつて、「教育が目指すもの」と題する、次のように詩を作り本誌にのせたことがあります（第八巻三月号）。

教育が／目指すものは／できるようになること／それは／人を／だますことが／できるようになること／人をにくむこと／うらむことが／できるようになること／人を／うたがうことが／できるようになること／でもある

このように、人間ができるようになることは、自己への執着を強めて、人間としてはしてはならないこともできるようになるということでもあるのです。それが、実は、無明と言えるのです。つまり、自分では、気付かないうちに（無意識のうちに）自己への執着を強め、無明の闇を作りだしているのです。

人間が生まれたときは、自己への執着をもってはいません。人間は実は、生まれながら自分の中に仏を宿しています。それを仏性といいますが、その仏性と自己の生きていこうとする生命への執らわれとが、誕生時には、未分化で渾然一体となっているのです。それが、成長の過程で分化し、自己の生命力への執着がおこってくるのです。その時、仏性の輝きがその執着によって覆われてしまうのです。それは、明かりが無くなること、つまり無意識の中で明かりを失うのです。それを私は、「こころの垢」と呼んでいます。

垢が付きますと、なかなか落ちません。無意識でのことですので、意識の世界でいくら反省しても、生命への

執着を捨てることはできないのです。そのためには、ひたすらな修行がいります。「毎日まいにちひたすら」、「こころを磨かなければならない」のです。それは、ヨーガであり、瞑想であり、坐禅であり、お祈りであり、読経であり、念仏であり、唱題なのです。

毎日ひたすらそうしているとき、無明の闇をはらって、無限に仏の世界に近づくことができるのです。

（二四四）恥を知らず、烏（からす）のように厚かましく、図々しく、人を責め、大胆で、心のよごれた者は、生活し易い。

（二四五）恥を知り、常に清きをもとめ、執着をはなれ、つつしみ深く、真理を見て清く暮らす者は、生活しがたい。

このはじめの偈は、なんと的確に現代人のことをそのままに表現していることでしょうか。私の理論でいう「自己」の肥大したもののことをずばり表しています。

恥を知らないとは、「他己」が弱いことを表していますし、図々しく、人を責めるのも、同じことです。ここころが汚れたという表現も、自己への執らわれ全体を示す言葉です。

近代から現代にかけて人々が、このように自己に閉じることで、現代文明を築き、生活し易くしてきましたが、いまや、日本も国民全体が大なり小なりこの（二四四）の偈にうたう通りになってきていると言えます。

そして、困ったことに、まだ、次の偈に述べるような「清く暮らす」ことをよしとする国民を搾取していることです。それは、近代のヨーロッパ先進諸国の植民地主義であったのですが、いまや、多くの国が搾取する側にまわろうとあがいています。世界中で起こっている民族の対立や独立を見れば明らかです。

この偈からも分かりますが、後者である事をやめて、前者になろうとすることが、仏教でいう末法の世界になっているのです。しかし、そのことを気付いている人はほんのわずかのように思えます。

いま、世界を覆っている民主主義は、多くの人の支持を得ていると思いますが、しかし、それには多くの欠点があります。その最大のものは、この偈にありますように、烏（からす）のように厚かましく、図々しく、人を責める傾向がますます強まっていることです。

この二つの偈をこころに刻んで、民主主義の欠点を克服して行かなければなりません。そうでないと、そうばん、世界は崩壊して行くことだと思います。

後記

一、梅雨が平年より十日以上も早く明けるや、天気が続いています。畑が、やけてきました。カボチャも小さい実は落ち、これから咲く雌花も花が咲かないままで、白くなって落ちています。

二、せっかく植えたサトウキビがやけてはと思い、水の汲み上げポンプを買いました。直径五〇ミリ、長さ五mの吸い上げホースと同直径、長さ三〇mの放水ホースを合わせて、五万円弱でした。ホンダ製で一分間に六〇〇リットルの汲み上げ性能です。さっそく、池から汲み上げましたが、エンジンは静かなのに、すごいいきおいで水が出るのに驚きました。

三、法句経の（二四四）にも出てきましたが、烏（からす）の害が目立ちます。一昨年、初めてこの地で畑をお借りしたとき、トウモロコシもトマトもほとんど食べられてしまい、昨年はトマトを数本だけで、トウモロコシは作りませんでした。ことしも同じにしています。でも、これまでと違って、まださつま芋が、ほとんど実が入っていないのに、つるを全部掘りあげてしまいます。これは、私が作る畑だけではないようです。よそでは、ナス、スイカ、ウリ、トマト、カボチャなどが被害にあっています。こんなものまでと思うものまで、荒らします。私のところでは、網を張ったり、糸を引いたり、脅しを立てたりしていますが、あまり効き目がありません。

四、私の畑には出ませんが、猿がスイカを荒らしにきます。外皮に小さな穴を開けて、中を全部食べています。そして、種だけをそこらに吐き出しています。実に、上手に食べるのにあきれます。

五、地元の篤農家の方に聞きますと、こんな動物による被害は、昔は全くなかったとのことです。

六、地球規模で、動物の生態が変わってきている証拠のように思われます。それは、自然全体が変わってきているということでもあります。

月刊　こころのとも　第九巻　七月号　（通巻一〇三号）

平成十年七月八日
〒772―8502
徳島県鳴門市鳴門町高島
鳴門教育大学　障害児教育講座気付
（ひびきのさと　沙門）中塚　善成（ぜんじょう）

本誌希望の方は、郵送料として郵便振替で年間千円を次の口座にお振り込み下さい。加入者名　ひびきのさと　口座番号01610―8―38660